

令和 3 年度 第 2 回教育課程編成委員会

日 時：令和 4 年 3 月 25 日（金）20：00～21：00

場 所：長崎医療技術専門学校 会議室

出席者：長尾 博、松本逸郎、西 啓太、有福浩二、大坪 建

分 部 哲 秋、韋 傳 春、岩永隆之、早野和之、林 勇一郎、荒木一博

司 会：韋 傳 春

1. 校長挨拶

・国家試験合格状況

理学療法学科；新卒 82.1%(全国 88.1%)、全体 79.1%(全国 79.6%)

作業療法学科；新卒 92.3%(全国 88.7%)、全体 88.9%(全国 80.5%)

理学療法学科では微妙な成績の学生がいたが、国家試験受験のチャンスを与えた。しかし厳しい結果となってしまった。

・入試の状況報告

令和 4 年度の入学試験がすべて終了した。一般Ⅱ期・Ⅲ期での合格者 PT 9 名・OT 5 名の内、入学者は 5 名という結果になり、PT39 名、OT24 名の入学となる。大学と併願していた者も多く、大学へ進んだ方も多かった。新型コロナの影響もあり、県外からの大学受験者が少なく進学しやすかったのではとの情報である。

2. 出席者紹介(自己紹介)

3. 開会

当委員会第 6 条の規定による出席数を満たしており、本委員会は適切に成立していること確認する。

4. 委員長選出

委員長は、分部哲秋校長で進めさせて頂く。

5. 前回会議後の報告

・オンライン授業対応における学生の成績状況について

蔓延防止等重点措置が発令されたことで、国家試験目前の 1 か月ほど 3 年生はオンライン対応となった。PT・OT の合格率に差が出たので、分析点等を報告する。

【作業療法学科】明確な要因とは言えないが、当クラスは 25 歳以上の学生が複数おり、4 つのグループで取り組む中に均等に混ざった形で取り組み、グループディスカッションなどでリードをとってくれていた。また、模擬試験の結果をもとにグループ編成の微調整をしながら取り組んだ。お互いの刺激になっていたように感じる。

【理学療法学科】活動班別(6～8 名の 6 班)をベースに取り組んだ。リモートで取り組む時間も OT 学科と同様に行っている。OT との違いは、班の編成は途中で変えていないところくらいである。休みの日などもリモートで取り組んでいたが、不合格となった者は、自己評価が高いというか、す

ぐ安堵する傾向にあったように感じている。リモート学習の中では発言も多く、ディスカッションもよく行っていたが、不合格になった学生もいる。不合格になった内の数名は、リモートよりも対面による取り組みのほうがよかったのではないかと感じた。

6. 審議事項

1) 定期試験問題の開示について

韋) 毎年のように休学・退学者が出ているが、今年度は例年より多い年であった。原因としては、「学習習慣が身につかない」「学習方法が確立できない」「学習意欲がわからない」といった学習面の問題が多かった。このような学生が学習しやすくなる一つの対策案として提出した。

林) 学力や集中力が欠けている学生が増えてきている。また保護者からも「問題を開示してくれないか」「採点の内容を見せてほしい」という声が出てきている。ご意見をいただき参考にしたい。

本校の現状は、問題・解答ともに回収し、点数のみ開示している。学生が希望した場合、常勤教員の科目においては一部開示する対応をしているものもある。非常勤講師の科目については、講師の希望で1科目のみ問題を開示している。

学生が実際に行っている再試験対策としては、定期試験後に仲間で問題の再現をしたりしている。先輩からの情報(過去問題の再現等)により勉強をしたりしているが、その解答が正しいかどうかは不明である。自ら振り返る力が非常に減少している傾向にあり、その一つの現象として、問題が違っていても先輩の解答をそのまま書いてしまっている。

ここ4年間の再試験の合格率を見たところ、例年80～85%程度であったものが、この2年は70%台に低下している。再試験を受けても1回では通らない傾向になっている。

問題や解答・解説を提示した場合の利点や欠点について、文献や大学等を参考にまとめた。利点としては、「どこを間違ったのか・正解したのかがフィードバックできる」「正しい解答がわかることで知識がしっかりしたものになりやすい」「過去問題などで事前学習が行いやすい」「教員のマナー化を回避できる」といった意見が書かれていた。欠点としては、「教科書・参考書の利用が減少してしまう」「テストのための勉強になり答えを丸暗記してしまう」「考える機会が減少してしまう」などが挙げられている。本校は次年度から全員がiPadを所有することとなり、教員の意図している以上に情報が拡散している状況があり、いわゆる答えだけが先走ってしまい、考える機会の減少につながっている。

各大学により開示の方法に違いはあり、それぞれに意図をもって取り組んでいた。おおよその学校では、過去問題は開示しているが採点内容の開示はしていないようである。京都大学の事例は、公的な問題(入試問題等)の開示はルールにあるが、学生からの定期試験問題の開示を求めた裁判である。開示する場合の良い効果と悪い効果の比率、能動的な学習をする学生と受身的な学生における開示の効果は異なるのではないかと。

大学の先生もいらっしゃるので、いろいろなご意見をお聞きしたい。

長尾) 教育心理学の分野ではすでに結果が出ており、スキナーが「結果を知らせることは学生のやる気を出させる」と言っている。つまり試験をしてすぐ(日数を開けず)に結果を知らせることでやる気が出るということが科学的に証明されている。なので、試験問題を開示する・しないの議論や、結果だけでどこが違ったかわからない状況で隠すという根拠がわからない。当然ながら、どこを間違ったかをそれぞれの科目担当者が学生にフィードバックすべきだと思う。定期試験も1講座

の授業を学ぶととらえ、再試験を受けても勉強になるのではないかという心理学の考えである。
どこを間違えたのかを教えないのは、学生にとってわかりにくいと感じる。

西) 現状は試験後に科目担当者に届けるであろうが、模範解答は作成しているのか。

林) 模範解答の作成は科目担当により違いはあると思う。解答を絶対見せないということではなく、希望がある場合に見せることもある。

西) 他校での問題作成では、模範解答の作成を必ず求められている。貴校のシステムとしてはどうしているのか。

林) 模範解答をお願いすることまではしていない。作成してくれている先生が多い感じではある。

分部) 他校は学生に答案を返しているのか。

西) 実際に返しているかは解らないが、おそらく常勤の教員が模範解答を見ながらフィードバックをしているようである。

長尾) 開示するのは点数にもよるのではないか。相当低い点数の場合はやる気を削いでしまうが、ぎりぎりの点数の学生の場合どこを間違ったか知ることによってやる気を起こすのではないか。

林) 学習をするきっかけにつなげるための方法としての一部が開示なのかどうかを考えたい。自分が努力した行為に対するフィードバックは非常に大事であることも理解できるし、試験も授業の一コマとしてとらえることを考えると、開示する効果は高いと推測できる。

長尾) 点数の低い人に対する対応は変えたほうがよい。

大坪) 開示に賛成ではあるが、どちらにしても利点・欠点があると思う。欠点部分をどうするかが問題だと思う。答えの丸暗記や考える機会の減少などに対し、統合と解釈ができるようになるなどにつなげていくかなど、欠点部分をどうクリアしていくかが大切ではないだろうか。

林) 授業を進めていく中で問題傾向や解説を示していくことを取り組んでいる科目が増えてきているが、再試験の合格率の低下が示されている。学力の低い学生に開示しても、結果は一緒ではないとも感じている。教員内でも、たとえば単純に覚えるなどの行為ができていくのかなどの疑問が上がっている。私の場合はたくさん書いて覚えたが、現在の学生はタブレットの影響もあるかもしれないが、学力の低い学生はタブレットを眺めるだけの学習になっている。それを考えると、下位層の学生には開示するよりも、ある一定の量は覚えるという行為をさせていく学習を授業に取り入れることもいいのではないかと話題になっている。つまり、ぎりぎりの学生には開示して、下位層の学生には別課題を与えていくことも大切になるのではないだろうか。

韋) 出発点はどうやったら学生のやる気を引き出せるのかであり、問題開示してどう利用するかも一緒に考えないと効果が出ないのではないかと思う。

林) 一番悪いパターンとしては、問題も解答も開示されて、試験を受けて不合格になり、その繰り返しで退学してしまうケースも増えてきている。開示するだけでは下位層には効果がないと感じている。

松本) 生理学の立場から言うと、今までやったことがない学問であり、言葉・用語を覚えなければならない点もあり、その用語の持つ意味を深く理解しないと生理学は難しいと思う。1年生の授業では、1・2講次に「試験はどういう問題ですか」と質問してくる。教科書をきちんと読んで、いろいろな言葉を覚えるよう伝えている。病理学等の病態に関する授業でそれを理解できる力をつけておかないと難しいと思う。

一番感じるのは、今まで専門的な訓練を受けていない子供たちが入学して、1年生の1講時目

の授業を受けて「これはハードルが高いな」と感じているのではないと思う。だからどんな試験問題が出ますかという発言になるのだと思う。そういう学生には、どういう問題が出て、どのように判定しますといったガイドラインを示したほうが勉強しやすいのではないと思う。後期になれば、前期で洗礼を受けているので「あの試験は難しい。地道にやらなければ」と把握しているのではと思う。

高い点数を取る学生は年齢が高い者で、どこかで一度はそういう訓練を受けてきた経験があればそんなに難しく感じないと思う。生物学を学んだことのないような初めての学生には「覚えてください」と伝えている。やはり一度トライして試験に落ちた学生が、もう一度読み直して再試験を受けると成績が伸びている。

基本的に問題を開示するかどうかに問題があるのではなく、モチベーションというか、きちんと勉強しなければと自覚した学生は、割と伸びていっている。

そういった点では、模擬試験(中間試験等)を一度行うことで、試験はこのようなものと理解できる。私の担当している科目では、定期試験問題と再試験問題では、出てくる用語は同じにしており、見直しができた学生は点数が伸びている。そのような取り組みができない学生は、非常に難しい状況である。

林) 今回の話題提供は、学生のやる気を引き出す・前向きになるための材料をみつけることであったが、やはりメリット・デメリットがそれぞれにある。考えようとする力は現場でも求められるものである。色々なご意見をいただき、学生にはチャンスを沢山与え、努力し続けていくところを如何に作っていくかが大切だと感じた。

松本) 本試験では、学生が「撒き餌方式」と言っている空欄に語群から選ぶ方式を用いており、ある程度言葉を覚えれば答えられるようにしている。一方、再試験では文章が正しいかどうかを問う形に変えており、国家試験もそうであるように、考えないと答えられないようにしている。

林) まずは暗記が大事だと感じた。問題を読むための言語を知らなければ、理解にもつながらないので、暗記をすることから、文章を読み、語群がなくても答えられるように段階を追っていく必要があると感じた。

7. 総評

分部) 最終的にこれが正解というものはないのかもしれないが、手順を踏んで段階的に取り組むことが大切だと感じた。それぞれ工夫して行っていきたい。

8. 閉会

韋) これを持ちまして第1回教育課程編成委員会を閉会する。

9. 謝辞

分部) 専門学校も難しい状況を強いられているが、先生方のご意見を参考に取り組んでいきたい。
ありがとうございました。

次回の教育課程編成委員会は令和4年10月7日(金)20:00を予定する。